

日本の大学における入学前教育 —編入留学生の留学前教育への示唆—

Pre-entrance Education at Japanese Universities: Suggestions for Transfer Students' Pre-overseas Education

陳 那森* 佐藤 広志* 中畠 康二** 小川 勤*** 山下 泰生*
Nasen CHEN Hiroshi SATO Koji NAKAJIMA Tsutomu OGAWA Yasuo YAMASHITA

抄 録

2020年度から「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」をスタートさせた。この研究を推進するための知見を得るために、これまでの入学前教育に関する先行研究のレビューに加え、関西国際大学における入学前教育関連データ(2017~2019年度)の分析を行った。その結果、いずれの年においても、入学前教育課題の達成率が高いほど、入学時点での基礎学力診断テストの成績および初年次春学期のGPAが高くなる傾向が見られ、かつ達成率の高群と低群の間に有意差が認められた。これらの結果から、前述の実証研究の推進にあたり、どのような示唆が得られるか考察した。

1 はじめに

2020年度から「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」をスタートさせた。この実証研究で対象としているのは、海外の大学から日本の大学に3年次編入留学という、通常とは異なる形の教育接続で入学してくる留学生である。日本国内からの3年次編入学の場合、編入学までの2年間に同一あるいは近接領域の学習をしていれば、編入学先大学の教育内容への接続や大学生活への適応にはほとんど問題はないと考えられる。しかしながら、海外の大学から、しかも日本に入国するまでに日本語しか習ったことのない学生を日本の大学へ3年次編入留学させようとした場合、仮に言語の問題をクリアしたとしても、日本人学生なら1、2年時に学ぶ専門領域の知識や日本の大学生活への適応などの面で課題が多い。

一方、日本の大学における入学前教育は、高校までの苦手科目や未履修科目の補填や、学習意欲の維持・向上、入学後に必要となる専門知識の習得などを主な目的として、約20年間の実績があり、後述の先行研究に挙げてあるように、多くの事例方法においてその効果も認められつつある。したがって、この実証研究を進めるにあたり、高大接続の取り組みの一環である日本の大学における入学前教育の知見は重要であると考えられる。

そこで、これまでの入学前教育に関する先行研究について概観した上、関西国際大学(以下、本学)における2017~2019年度の関連データを用いて分析を行い、入学前教育の効果について確認することにした。分析の結果、いずれの年においても、eラーニングによる入学前教育課題(以下、KUISドリル)の達成率が高いほど、入学時点での日本語運用能力テストおよび基礎学力診断テストの成績、さらに初年次春学期のGPAが高くなる傾向が見られ、かつ達成率の高群と低群の間に有意差が認められた。こうした結果を踏まえ、これらの取り組みから、前述の編入留学生を対象とした留学前教育に関する実証研究の推進にあたり、どのような示唆が得られるか考察した。

* 関西国際大学経営学部 教育総合研究所学内研究員
** 関西国際大学社会学部 教育総合研究所学内研究員
*** 静岡福祉大学子ども学部 教育総合研究所共同研究員

2 先行研究

入学前教育の起源は 1999 年に中央大学の商学部が大手予備校と提携して通信教育型の入学前教育を導入したのが最初だと言われており、これは推薦入試や AO 入試といったいわゆる非学力選抜の入学者を対象としたものであった¹⁾。また、2000 年に出された大学審議会の「大学入試の改善について」(答申)においても、推薦入学や AO 入試等の早期合格者に対して、入学前から学習指導を行うことが望まれる、と述べられていた²⁾。こうした歴史的経緯からも推測されるように、入学前教育は、推薦入試や AO 入試による入学者を念頭に始められたのであり、その主な狙いとして、入学までの学習習慣の維持や、高校までの基礎学力の補強・向上、大学での学びへの動機づけ、などが挙げられる³⁾。

入学前教育の実施方式として、当初は郵送による通信添削教育が主流であったとされているが、インターネット環境の普及により、近年では e-Learning 利用型の入学前教育プログラムが増える傾向にある。また、その実施内容としては、従来から高校までの基礎学力の補強・向上を意図した、いわゆるリメディアル教育型の入学前教育プログラムが大きなウエイトを占める。その一方で、近年では入学予定者に大学のキャンパスに来学してもらい、教職員や在学生との対面型の交流をはかりながら、入学までの意欲や動機を強化し、大学生活への不安を軽減することにより、入学後の大学への適応を促進することを目的とした、初年次教育型の入学前教育がより重要視されるようになってきた。このように入学前教育をリメディアル教育型と初年次教育型に大別することができるが、大学によっては、この両者を組み合わせた併用型もある。以下では、こうした入学前教育に関する先行研究を概観する。

濱名(2004)は、高校と大学の接続の問題に焦点をあて、ふたつの異なる学校段階の教育を学生がうまく移行していくことを、学校の側がどのように支援していけるかということについて、海外の事例を含みいくつかの考え方を整理し、大学側の初年次教育という取り組みの可能性を検討した⁴⁾。その中で、高大接続関係の揺らぎへ対処するための新たな仕組みとして、大学から高校への出前授業、高校生の大学授業の単位取得プログラム、入学が決定した生徒に対する入学前教育等の高大連携プログラムについて、入学試験の選抜性が低下したことをむしろ積極的にとらえ、偏差値のみに頼らない進学先選びという進路選択本来の姿を高校生に示している点を評価している。

向後ら(2006)は、受講形態の自由度から、インターネットを利用した e-Learning による入学前教育の柔軟性に着目し、文章表現の入学前教育を e-Learning によって実施し、受講者から高く評価された事例を報告している⁵⁾。

小林ら(2006)は、高等学校でのカリキュラムの違いからくる入学時の基礎学力の差を縮める取り組みとして、推薦入試合格後から大学入学までの気持ちが緩みがちな時期に入学前通信添削教育を行った。この取り組みが、高校における学力の維持、学習意欲の継続にかぎらず、これからはじまる大学での学習に対する心構え、入学後の学習意欲につながり、高校大学を接続する効果的な一方法である⁶⁾、としている。

川西ら(2008)は、入学前教育時の e-Learning 利用を通じて学習時間が多かった学習者は、入学後にも関連する e-Learning 教材を継続利用することで、該当科目の成績が向上する傾向にあることを示した⁷⁾。

井内ら(2011)は、学科が異なる多様な学生に効果的な入学前教育を行うために、初等教育学科と看護学科の入学予定者を対象に実施した e-Learning による入学前教育に対する評価と学習時間・学習成績の関係を検討した⁸⁾。その結果、いずれの受講生も e-Learning が学習に役立つことやその利便性を高く評価し、e-Learning が有効な学習方法であると認識していることが示された一方で、一部では学科間や学習成績の高低で e-Learning に対する評価に差異が認められたことから、学科ごとに受講生の ICT スキルや知識を把握しながら、e-Learning による学習方法の改善を検討する必要性を指摘している。

日本リメディアル教育学会が全国の大学を対象に行った 2011 年のアンケートにおいて、入学前教育の実施目的として最も多く挙げられるのは「AO や推薦で入学してくる生徒の学力維持・向上」(84%)であった⁹⁾。しかしながら、千島ら(2015)は、新入生のアパシー

傾向の抑制と大学環境への適応促進のためには、大学入学という目標に代わる「次なる目標を、大学生活の中で設定できるような支援」が必要であり、入学前教育課題も学科の学びの理解を促進し、目標意識を高める内容に変革していく重要性を指摘している¹⁰⁾。

以上で見てきたように、日本の大学における入学前教育は、当初からの補修型に加えて、最近では学科の学びへの理解と大学生活への適応を重視した適応促進型の比重が増える傾向にあるように思われる。何れにせよ、各大学がそれぞれの教育理念・目標に合わせ、入学してきた学生を大学生活と大学での学習に円滑に移行させ、成功に水路づけることを大学として組織的に行うことは、新しい接続関係の構築のために必要なものである⁴³⁾。

3 本学における入学前教育

3.1 導入の経緯

本学では、正式には2003年度から入学前教育を導入した。当初は「ウォーミングアップ学習」という名称で、本学が日本の大学の中で最初に設置した学習支援センターが主催してきた取り組みである。じつはそれ以前から、学科単位で、AO選考で入学が決定した学生に対し、1) 読んでおいてほしい図書を指定しレポートを書いてもらい、コメントをつけて返却する、2) 英語や漢字の教材を指定し、問題をやってもらい提出させる等の、いわば入学前教育にあたることを実施していた。これをAO選考に限らずすべての学生に拡大し、全学的に正式に導入したのは2003年からである。詳細は、濱名(2007)と上村(2018)を参照されたい¹¹⁾¹²⁾。

3.2 プログラムの概要

本学における入学前教育プログラムについて、導入開始年順にその概要を表1に纏めた。

表1 本学における入学前プログラムとその概要

| 導入開始年 | プログラム名 | 概要 |
|-------|-------------|--|
| 2003 | ウォーミングアップ学習 | スクーリング型の入学前教育プログラムである。目的は、入学前に抱く大学生活の不安を軽減させることである。本学では、当初から、このプログラムを初年次教育のスタートと位置づけていた。 |
| 2009 | 日本語運用能力テスト | 目的は、短い時間(10分程度)で新入生の基礎学力を測り、その後の面談や履修指導の参考にするためである。漢字検定3級から準2級相当の漢字テストと日本語検定問題を参考に作成。漢字力が読解力や学習習慣と相関性が高いという観点からの実施であった。 |
| 2009 | ゼミナール入門 | 大学のゼミナールを体験させるプログラムで、そのコンテンツとしてコモリーディング(共通の課題図書を用いた読解の訓練)を取り入れた。実際の進行では、ペアワークやグループワークなどを取り入れており、入学後のアクティブラーニングのスタイルに慣れてもらうという目的もあった。ウォーミングアップ学習の一部として取り入れた。 |
| 2015 | 論理思考力テスト | 物事を体系的に捉え、筋道を立てて考える力を測るものであり、本学教育目標の1つである、根拠にもとづいて、問題を発見したり解決のアイデアを構想したりする思考力や判断力を身につけ、問題を解決することができる問題発見・解決力にも合致している。 |
| 2016 | KUISドリル | インターネットの普及と高校生のスマホ所持率の増加を踏まえ、eラーニングによる基礎学力の補完を行う。このeラーニングによる入学前教育については、アドミッションポリシー(AP)の中で「入学前教育として求められる、必要な基礎的な知識を身につけるためのeラーニングプログラムに最後まで取り組むことができる」のように、明記されている。 |
| 2018 | 基礎学力診断テスト | 2015年に導入した論理思考力テストと大学入試センター開発したテストと統合したもので、言語的/非言語的論理思考力テストともいう。 |

本稿では、2016年から導入された表1の中のeラーニングによる入学前教育であるKUISドリルのデータ(2017年度～2019年度)と、入学時の日本語運用能力テストと基礎

学力診断テスト、さらには初年次春学期の成績とを突き合わせて、これらのデータ間の関連性を分析することで、濱名（2007）の研究結果を補完するとともに、筆者らが2020年度からスタートさせた「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」を遂行するにあたり、これらの分析結果からどのような示唆が得られるか考察しようとするものである。

なお、KUIS ドリルのデータとしては、2021年度まで蓄積してはあるが、その中の2017年度～2019年度だけを分析に用いた理由は、2020年度と2021年度のデータの収集においては、新型コロナウイルス感染拡大の影響を強く受けて、それまでとは異なるタイミングで日本語運用能力テストと基礎学力診断テストの実施を余儀なくされ、また遠隔授業の実施に伴い、成績評価も通常とは異なる傾向がある可能性などを考慮したためである。

3.3 分析結果

e ラーニングによる入学前教育である KUIS ドリルのデータ（2017年度～2019年度）と、入学時の日本語運用能力テストと基礎学力診断テスト、さらには初年次春学期の成績とを突き合わせて、これらのデータ間の関連性を分析した結果の一部を、以下、表2～表8と図1～図6に示す。

このうち、表2～表4では、この3年間の KUIS ドリルの達成率を100%、50%～100%未満、1%～50%未満、1%未満の4つの群に分けた上で、これら4群に対応する日本語運用能力テスト、基礎学力診断テストのスコアおよび初年次春学期の GPA のそれぞれの平均を算出している。図1～図3は、表2～表4を視覚化したものである。これらの図表から、KUIS ドリルの達成率が高いほど、入学時点での日本語運用能力テストと基礎学力診断テストのスコアおよび初年次春学期の GPA が、何れの年においても高くなる傾向が見てとれる。

表 2 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA（2017年度）

| KUISドリル達成率 | 人数 | 人数の割合 | 平均GPA | 日本語運用能力(25点満点) | 基礎学力診断(48点満点) |
|------------|-----|-------|-------|----------------|---------------|
| 100% | 358 | 0.69 | 2.7 | 12.8 | 14.5 |
| 50%～100%未満 | 66 | 0.13 | 2.4 | 11.8 | 13.3 |
| 1%～50%未満 | 61 | 0.12 | 2.2 | 11.1 | 13.1 |
| 1%未満 | 35 | 0.07 | 1.9 | 8.6 | 11.1 |

表 3 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA（2018年度）

| KUISドリル達成率 | 人数 | 人数の割合 | 平均GPA | 日本語運用能力(25点満点) | 基礎学力診断(48点満点) |
|------------|-----|-------|-------|----------------|---------------|
| 100% | 365 | 0.66 | 2.8 | 13.7 | 26.0 |
| 50%～100%未満 | 70 | 0.13 | 2.3 | 11.7 | 21.4 |
| 1%～50%未満 | 62 | 0.11 | 2.0 | 10.3 | 19.5 |
| 1%未満 | 52 | 0.09 | 1.8 | 7.2 | 16.3 |

表 4 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA（2019年度）

| KUISドリル達成率 | 人数 | 人数の割合 | 平均GPA | 日本語運用能力(25点満点) | 基礎学力診断(48点満点) |
|------------|-----|-------|-------|----------------|---------------|
| 100% | 315 | 0.59 | 2.9 | 13.1 | 27.1 |
| 50%～100%未満 | 89 | 0.17 | 2.6 | 11.7 | 25.0 |
| 1%～50%未満 | 105 | 0.20 | 2.2 | 10.2 | 23.1 |
| 1%未満 | 21 | 0.04 | 2.1 | 6.1 | 19.2 |

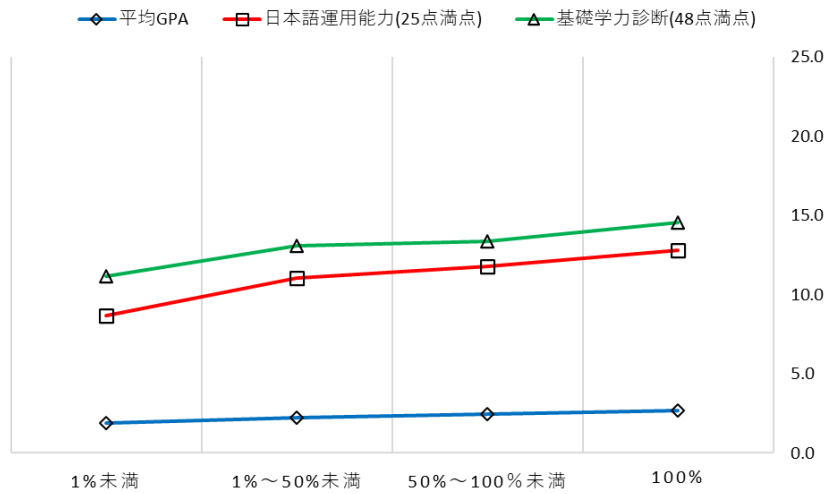


図 1 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA (2017 年度)

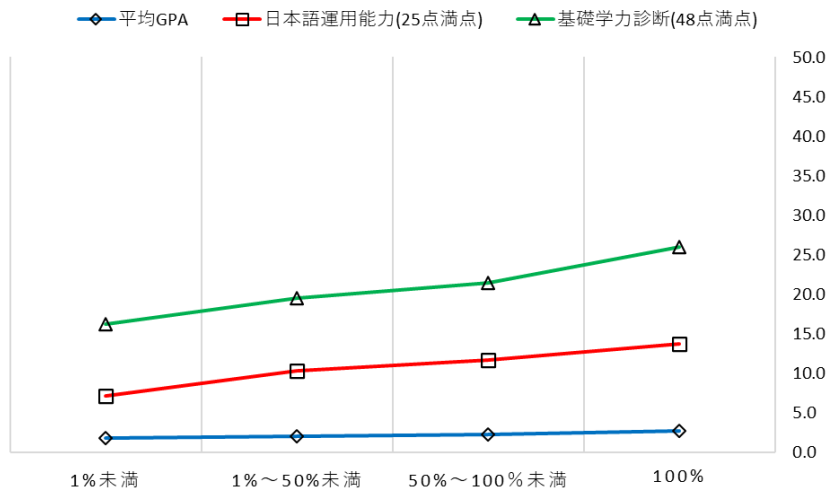


図 2 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA (2018 年度)

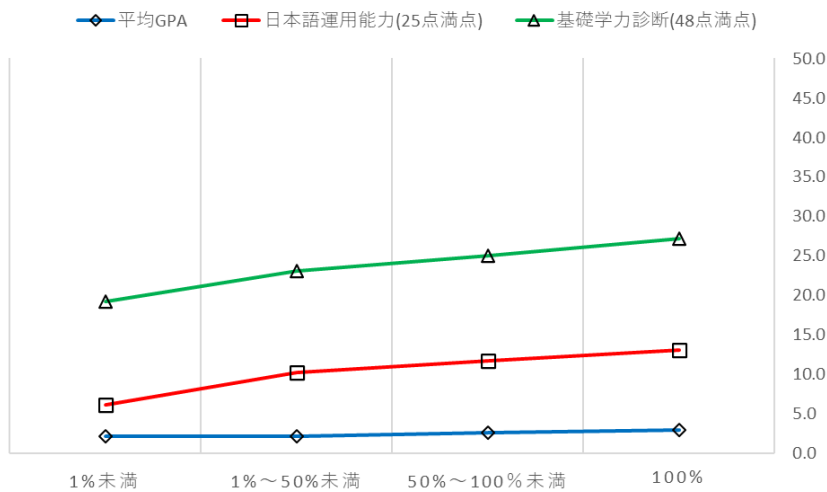
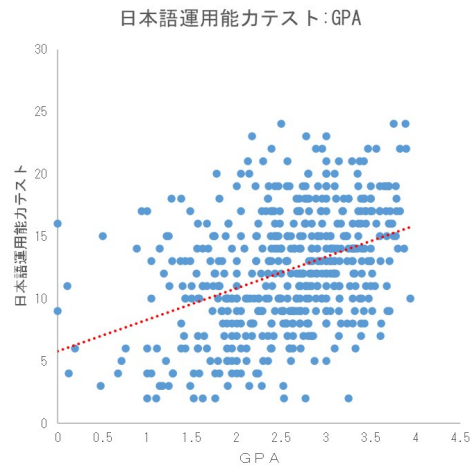
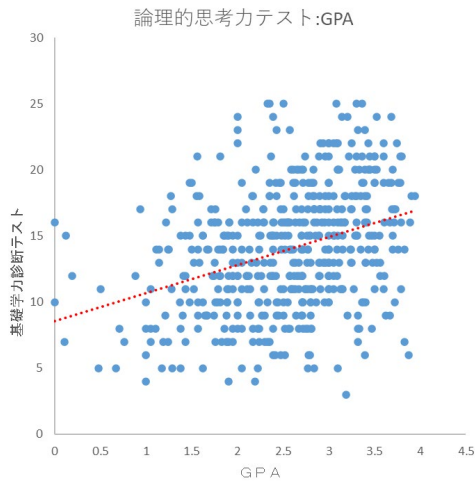
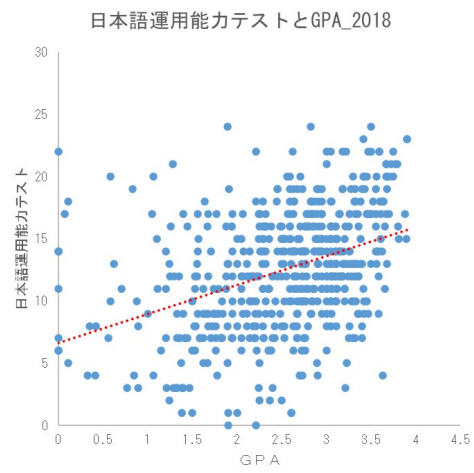
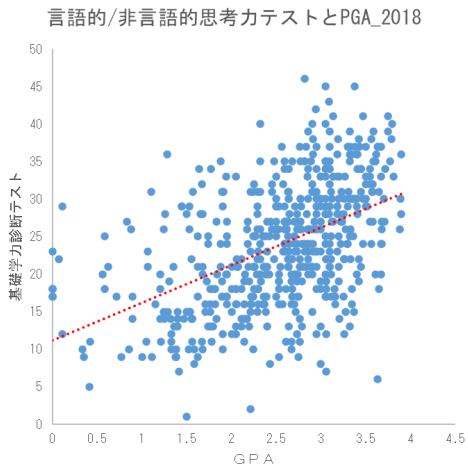


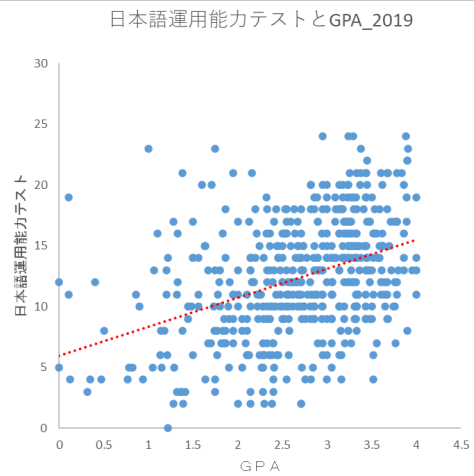
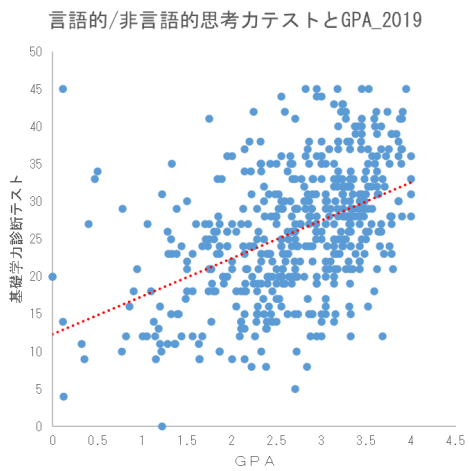
図 3 KUIS ドリルの達成率と入学時の学力および初年次春学期の GPA (2019 年度)



(a) (b)
 図 4 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA (2017)



(a) (b)
 図 5 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA (2018)



(a) (b)
 図 6 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA (2019)

図 4～図 6 では、左側の(a)は、2017 年度～2019 年度の入学時に実施した日本語運用能力テストのスコアと初年次春学期の GPA を、また右側の(b)は、基礎学力診断テストのスコアと初年次春学期の GPA を、それぞれプロットしたものである。また、表 5～表 7 は、これらの項目間の相関係数を年度別に算出したものである。図表から、これらの項目間で比較的安定した正の中程度強さの相関があることが読みとれる。

各年度における KUIS ドリルの達成率により分けたグループ間で、日本語運用能力テスト、基礎学力診断テストおよび GPA のそれぞれの平均値に、有意差があるかどうか確認するために分散分析を行った。その結果、KUIS ドリルの達成率の効果はいずれの平均値でも有意であった(表 8)。さらに Tukey b を用いた多重比較の結果から、KUIS ドリルの達成率の高いグループとほとんど取り組んでいないグループとの間に、何れの年において有意差があり、KUIS ドリルの達成率が高いと、これらの平均値が高いことが分かった。

表 5 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA との相関 (2017)

| | 2017年度春・夏_GPA | 日本語運用能力テスト | 基礎学力診断テスト |
|---------------|---------------|------------|-----------|
| 2017年度春・夏_GPA | 1 | | |
| 日本語運用能力テスト | 0.396 | 1 | |
| 基礎学力診断テスト | 0.346 | 0.407 | 1 |

表 6 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA との相関 (2018)

| | 2018年度春学期 GPA | 日本語運用能力テスト | 基礎学力診断テスト |
|---------------|---------------|------------|-----------|
| 2018年度春学期 GPA | 1 | | |
| 日本語運用能力テスト | 0.386 | 1 | |
| 基礎学力診断テスト | 0.489 | 0.625 | 1 |

表 7 入学時の基礎学力と初年次春学期の GPA との相関 (2019)

| | 2019年度春学期 GPA | 日本語運用能力テスト | 基礎学力診断テスト |
|---------------|---------------|------------|-----------|
| 2019年度春学期 GPA | 1 | | |
| 日本語運用能力テスト | 0.388 | 1 | |
| 基礎学力診断テスト | 0.459 | 0.600 | 1 |

表 8 年度別平均値種類別 F 値の一覧表

| | GPA | 日本語運用能力テスト | 基礎学力診断テスト |
|--------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 2017年度 | F(3,506)=15.097,p<.001 | F(3,506)=7.592,p<.001 | F(3,506)=6.189,p<.001 |
| 2108年度 | F(3,542)=44.277,p<.001 | F(3,542)=42.123,p<.001 | F(3,542)=36.881,p<.001 |
| 2019年度 | F(3,528)=28.566,p<.001 | F(3,528)=12.866,p<.001 | F(3,528)=7.553,p<.001 |

4 考察

第 3.3 節での分析結果から、e ラーニングによる入学前教育である KUIS ドリルに着実に取り組んでいけば、GPA が比較的安定していることが、本学の事例から明らかになった。当然ながら、GPA の値にはさまざまな要素が影響を与えるものと考えられることから、この結果のみから KUIS ドリルは入学後の成績に影響したとまで結論付けることはできないが、KUIS ドリルの達成率は入学後の成績の予測には役立つことを示すものと捉えることができる。こうしたデータがまた初年次秋学期以降の学習計画の立て方や履修指導の参考になることなどを考えあわせれば、入学前教育はもはや大学教育全般にとって不可欠な部分であり、「今日では、高校と大学の教育を接続する仕組みを、大学教育のプログラムとして取り込むことが必要になっている⁴⁾」こともうなずけるであろう。そういう意味においては、

今回の分析結果は、濱名（2007）の本学の初年次型入学前教育に関する研究結果¹¹⁾を、eラーニングによるリメディアル型入学前教育に関する客観的データに基づき裏付けたものと言える。

これらの結果を踏まえ、以下では、冒頭で述べた国境を跨る編入留学生を対象とした入学前教育に関する実証研究の推進にあたり、約20年もの年月を経て蓄積されてきた高大接続においてその効果が認められつつある日本の大学における入学前教育の知見から、どのような示唆が得られるか考察する。

(1) 編入留学生の教育接続上の特徴と課題

これまで、いわゆる学部1年生からの入学生を対象とした入学前教育について見てきた。ここからは、海外の大学で2年間在籍してから日本の大学の学部で3年次編入留学するという、通常とは異なる形態の教育接続も対象に入れて議論を進める。

日本国内からの3年次編入学の場合、編入学までの2年間に同一あるいは近接専門領域の学習をしていれば、編入学先大学の教育内容への接続や大学生活への適応にはほとんど問題はないであろう。しかしながら、海外の教育機関との提携等に基づく3年次編入留学のような教育接続は、日本国内における高大接続や3年次編入学の場合と比較してより複雑に要因が関わっているものと考えられる。しかも近年、編入留学希望者のほとんどが来日するまでに日本語しか習ったことのない日本語学科の学生が多く、仮に語学の問題をクリアしたとしても、2年間で日本の大学を卒業するためには、早期に日本人学生が1、2年次に履修する専門領域の知識を習得することや、日本という海外での大学生活への適応など、さまざまな面で課題が多いのが現状である。表9は、入学前教育における学部1年生の入学予定者と学部編入留学予定者の対比をしたものである。

表9 入学前教育における学部1年生の入学予定者と学部編入留学予定者の対比

| | 学部1年生の入学予定者 | 学部編入留学予定者 |
|---------|------------------------------------|-------------------------------------|
| 入学前学習期間 | 最長6か月 | 最長4か月(協定等による連携プログラムとして提供する場合、2年間も可) |
| 学習目的 | 高校までの学習内容の補強 | 1、2年時専門基礎科目の補填 |
| 学習内容 | 国、数、英、社会、理科の基礎知識 | 留学前に身につけておくべき専門基礎知識 |
| 学習方法 | オンデマンド型ドリル式確認テスト(eラーニング) | LMSを活用したオンデマンド型学習とオンラインのライブ授業 |
| 学習環境 | ノートPCやスマホを利用して、インターネット経由でシステムにアクセス | ノートPCやスマホを利用して、インターネット経由でシステムにアクセス |
| 課題 | 実施率・達成率に改善の余地あり、適宜に質問に対応難、 | 分かりやすい学習コンテンツと不安軽減につながる情報の提供等 |

(2) eラーニングによる入学前教育の有効性

遠隔教育やeラーニングの意義について、岩崎（2015）は教育や学習の機会の拡大と、社会的、経済的な格差の解消に繋がると指摘する¹³⁾。遠く離れた地の人々がテレビ会議で繋がる同期型や、作成したコンテンツを海外に住む学生に発信できる非同期型など、離れている人と人とを繋ぐ教育機会としてその可能性は大きい。

今回レビューした40編を超える文献の中でも、三分の一以上においては、さまざまな形で入学前教育にeラーニングを活用しており、その有効性が示されている^{5)7)8)13)~23)}。上村（2018）は、eラーニング型のKUISドリルを導入した理由として、インターネットの普及と高校生のスマートフォンの所持率の向上を挙げている¹²⁾。eラーニングによる入学前教育では、学習管理システム(LMS)を活用することにより、受講者の学習状況をリアルタイムで把握し、学科から受講者に個別にコメントしたり、あるいは一斉に知らせを出したりするなどのメリットがある、と伊藤ら（2013）が指摘している¹⁴⁾。

他方、筆者らのこれまでの研究において、スマートフォンやタブレット端末、ノート PC などのスマートデバイスの大学における授業内外での学習活動への活用の有効性が明らかになっている^{24)~29)28)}ように、時間と空間の制約を受けずに何時でもどこからでも学習活動が進められることは、学習者側にとっての大きなメリットと言えるであろう。

このように、教育を受ける側と提供する側の両方にとってメリットが大きいとされている e ラーニングを活用した教育活動は、特に新型コロナウイルス感染拡大にきっかけに、地球規模でほぼすべての学校段階における教育活動のデジタル化・オンライン化へのパラダイムシフトを加速させていることは周知の事実であろう。

(3) 編入留学生在が入学前に学習要件を満たせる留学前教育とは

編入留学生は、一般的に、編入後は 2 年間しか在籍せずに卒業するため、その前の「空白」の 2 年間で埋めるべく専門領域の基礎科目の補修は、できれば来日する前に済ませることが、学習内容の順序性から見ても自然なことであろう。このような考え方に基けば、「空白」の 2 年間で埋めるべく専門基礎科目は、留学前教育として実施する必要がある。しかし、誰がどのような方法でこのような留学前教育を行うことができるか、という問題が生じる。編入留学生の教育接続上の特徴と近年の e ラーニングによる入学前教育の有効性の事例報告などから、受け入れ学科が主体的に実施することが望まれる。

学習内容については、受け入れ大学の教育システムへの円滑な接続・移行が図られるように、当該学科のカリキュラムに基づいた専門基礎科目を中心として設計する必要がある。学習コンテンツについては、1、2 年生向けの専門科目を録画し編集して使うことも可能であろうし、アウトソーシングも考えられる。具体的な実施手順として、以下の通りに考えられる。

- ① 受入大学の LMS で事前に学習用コンテンツを配信して、受講者は情報端末を用いて各自で勉強し、関連の課題を解いて LMS などで提出する。
- ② 受入大学教員による遠隔講義（確認テスト、レクチャー、次回に向けての課題など）。
- ③ 留学前学習期間中、LMS においてコースごとに会議室を立ち上げ、受講者同士のディスカッションを活性化させる。また、受入大学の学生メンターによる学習支援も行う。もちろん、授業担当教員によるグループ別や個別指導も適宜実施するものとする。

そして、このような取り組みを通して得られたテスト結果や、LMS へのアクセスログなどを分析し、さらに来日後の学業成績や日本での大学生活への適応状況等のデータと突き合わせることで、その効果を検証し改善を図ることが可能であると考えられる。

いずれにせよ、入学予定者の特性やニーズに応じて入学前教育の内容や実施方法を検討することが必要である。今回は、日本国内における大学の入学前教育に関する文献のレビューと本学における実施事例を参考に、編入留学生在が入学前に学習要件を満たせる留学前教育をどのように実施すべきかについて検討してきたが、筆者らはこれらと並行して留学を希望する国外の大学生が、国境を越えた「仮想反転授業」という学習スタイルをどのように捉えているのかを明らかにするための調査研究も実施する予定であり、その結果から得られる知見も加味し、編入留学生の受け入れを海外協定校との教育プログラムの接続と捉えて検討を重ねていきたい。

5 おわりに

本稿では、2020 年度からスタートさせた「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」を推進するための知見を得るために、これまでの入学前教育に関する先行研究のレビューに加え、関西国際大学における入学前教育関連データ（2017～2019 年度）の分析を行った。先行研究のさまざまな事例から、入学前教育の有効性、特に LMS の活用による取り組み状況の把握しやすさおよび受講者側が時間と空間に制約されずにい

つでもどこからでも学習できるなどのメリットがあることがわかった。本学の関連データの分析結果から、eラーニングによる入学前教育である KUIS ドリルに着実に取り組んでいけば、GPA が比較的安定していることが明らかになった。また、KUIS ドリルの達成率が、入学後の成績の予測にも役立ち、継続的な履修指導や学習計画の立案の参考になることが示された。これらの知見を参考にしながら、編入留学生の教育接続上の特徴と課題を踏まえ、編入留学生にとって望ましい留学前教育の実施の方略について、今後具体的な検討していきたい。

付記

本研究は、日本学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (課題番号 21K02642) による支援を受けています。

参考文献

- 1) 倉田康路他 (2012) 「入学前教育プログラムの効果と今後の課題 ―西九州大学健康福祉学部社会福祉学科の取組を通じて―」西九州大学健康福祉学部紀要 43, 113-122
- 2) 大学審議会「大学入試の改善について」(答申)、2000年11月22日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryu/attach/1335667.htm
- 3) 樋口 健 (2014) 「入学前教育の 課題を考える」VIEW21 大学版_2014、Vol.4 Winter pp.19-23.
- 4) 濱名陽子 (2004) 「初年次教育と高校・大学の接続」関西国際大学高等教育研究叢書第5号、143-154.
- 5) 向後千春他 (2006) 「eラーニングによる大学入学前教育 「文章表現」 の設計・実践とその評価」日本教育工学会研究報告集 2006(3), 79-86.
- 6) 小林俊公、渡会征三 (2006) 11-107 推薦入試入学予定者の数学入学前教育とその効果 ((22) リメディアル教育(補習教育)・導入教育-I)、工学・工業教育研究講演会講演論文集, 208-209.
- 7) 川西 雪也他 (2008) 「e-Learning を活用した入学前教育に関する実証研究」メディア教育開発センター、メディア教育研究 5(1), 87-95.
- 8) 井内 伸栄, 田中 希穂 (2011) 「e-Learning による入学前教育に対する評価の学科比較」大阪信愛女学院短期大学紀要 45, 47-55.
- 9) 穂屋下茂・小野博・米満潔・竹内芳衛 (2012) 「全国 の大学対象のアンケート実施とその結果 (2011 年 度)」『リメディアル教育研究』7 (1) 3-16.
- 10) 千島雄太、水野雅之 (2015) 「入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響：-文系学部の新入生を対象として-」『教育心理学研究』63 (3) pp228-241.
- 11) 濱名陽子 (2007) 「入学前教育の効果-関西国際大学の事例-」関西国際大学高等教育研究叢書、第6号、81-88.
- 12) 上村和美 (2018) 「入学前教育プログラム」『関西国際大学編、大学教学マネジメントの自立的構築―主体的学びの大学創造 20 年史』pp.12-17.
- 13) 岩崎 浩与司 (2015) 「【書評】尹 智鉉著 遠隔の日本語教育と eラーニング_テレビ会議システムを介した遠隔チュートリアルの可能性」早稲田日本語教育学(19), 91-96.
- 14) 伊藤知子 (2013) 「入学前教育におけるドリル形式課題の導入についての一考察」国際研究論叢：大阪国際大学紀要 26(3), 87-97.
- 15) 星 健太郎他 (2011) 「早稲田大学における 2011 年度大学入学前導入教育について」MNC Communications (13).
- 16) 大河内 佳浩他 (2012) 「eラーニングを利用した入学前教育と初年次教育への接続：大学全入時代の入学前教育と初年次教育の在り方を探る」工学教育研究講演会講演論文集 2011(0), 24-25.

- 17) 鈴木雅之、孫媛 (2013) 「eラーニングを利用した入学前教育の効果：早期入学決定者を対象とした英語学習」日本行動計量学会大会抄録集 41(0), 186-189.
- 18) 林 世津子他 (2015) 「東京医療保健大学医療保健学部看護学科における入学前教育プログラムの効果」東京医療保健大学紀要 10(1), 23-28.
- 19) 小山田 圭吾他 (2018) 「オンライン上での相互チェックを取り入れた入学前教育におけるプログラミング学習環境の開発」情報処理学会 第 80 回全国大会講演論文集 2018(1), 617-618.
- 20) 平山克己、隅本覚 (2020) 「Online IRT による web 版経済学部入学前教育(数学)システムの開発について」北九州市立大学商経論集 55(1-4), 19-24.
- 21) 山本 貴恵,大場 枝里,長田 厚樹 (2020) 「学習者主体の入学前教育開発に向けてー2017年-2018年度における取り組みと考察」神田外語大学紀要 (32), 337-354.
- 22) 小山田 圭吾 (2020) 「入学前教育 eラーニングのプログラミング課題におけるチューター支援環境の構築」第 82 回全国大会講演論文集 2020(1), 763-764.
- 23) 市原 乃奈 (2021) 「留学生の「日本語」大学入学前教育にはどのような媒体が有効か」拓殖大学日本語教育研究 (6), 23-56.
- 24) Nasen Chen and Yasuo Yamashita (2017) “The Possibility for the Active Use of Smart Devices in University Education” Proceedings of the 6th International Congress on Advanced Applied Informatics, 99-104.
- 25) 陳那森・山下泰生 (2017) 「大学教育におけるスマートデバイス活用の可能性」『関西国際大学研究紀要』 第 18 号 37-45.
- 26) 陳那森・山下泰生 (2016) 「授業外学修におけるスマートデバイスの活用の可能性」『関西国際大学研究紀要』 第 17 号 101-108.
- 27) 陳那森・山下泰生・窪田八洲洋 (2016) 「大学教育におけるスマートデバイス活用の現状と課題 ～留学生と日本人学生との比較調査の結果を踏まえて～」日本教育情報学会第 32 回全国大会論文集 37-45.
- 28) 陳那森・山下泰生・窪田八洲洋 (2014) 「情報環境の社会的進展を重視したユーザビリティの高い新たな教育環境の可能性に関する提案」日本教育情報学会第 30 回全国大会論文集、168-169.
- 29) 陳那森 (2021) 「仮想反転授業による国境を越えた教育接続における課題改善の試み」関西国際大学 教育総合研究所研究叢書 第 14 号 65-173.

Abstract

From 2020, we have started “Empirical Research on Pre-overseas Education by Cross-border ‘Virtual Flipped Classroom’”. To gain insights to drive this research, we analyzed pre-entrance education-related data (2017-2019) at Kansai University of International Studies, in addition to the reviews of previous studies on pre-entrance education. As a result, in any year, the higher the achievement rate of the tasks for pre-entrance education, the higher the grade of the diagnostic test for basic academic skill at the time of admission, also the GPA of the first spring semester tends to be higher. Moreover, a significant difference was observed between the high and the low groups of achievement rate. Based on the above results, we considered what kind of suggestions could be obtained in promoting the above-mentioned empirical research.